

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720003

研究課題名(和文) 前期から最晩期へ至るウィトゲンシュタインの世界観の変遷

研究課題名(英文) The change of Wittgenstein's world view from the early thought to the last thought

研究代表者

山田 圭一 (Yamada, Keiichi)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：30535828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、まず可能性の総体としての世界についての前期・中期・最晩期のウィトゲンシュタインの思想の変遷を明らかにした。前期『論理哲学論考』において命題間の否定関係のうちに捉えられていた論理空間が、中期において矛盾はしないが相互に排除し合う性質をもとに形成される文法体系へと分割されていき、最晩期においてそれが言語ゲーム内での否定可能性と言語ゲームを支える蝶番命題の否定可能性という多層的な構造をもつに至ることを明らかにした。その上で、ウィトゲンシュタインが前期から最晩期から一貫して探究していた言語の可能性の条件が、主体の受肉を通じて世界的なものから世界的なものに転換していることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research, I elucidated changes of Wittgenstein's view of the world as the totality of possibilities from his early thought to his last thought. In his early thought (Tractatus Logico-Philosophicus), the logical space is constructed by negative relations of propositions, in his middle thought the logical space is divided into grammatical systems which is constructed by eliminative relations of properties, and finally in his last thought, the logical space has multilayered construction in that negative relations of propositions in language games is the different layer from the negative relations of hinge propositions which sustain language games. And then I showed that Wittgenstein had investigated the conditions of language throughout his life, but it had changed from out-world conditions to in-world conditions by incarnation of the subject.

研究分野：分析哲学

キーワード：ウィトゲンシュタイン 言語 知識 確実性

1. 研究開始当初の背景

20 世紀の哲学に大きな影響を与えたウィトゲンシュタインの哲学に関しては、すでに数多くの先行研究が為されてきた。しかしながらそれらの研究の多くは、『論理哲学論考』（以下、『論考』と省略）を書いた「**前期**」ウィトゲンシュタイン哲学に関する研究か、あるいは『哲学探究』（以下、『探究』と省略）を書いた「**後期**」ウィトゲンシュタイン哲学に関する研究のどちらかであった。あるいは、この前期と後期の間の時期を「**中期**」として規定した上で、前期から後期への転換過程について分析したハッカー（『Insight and Illusion』（1972））、マルコム（『Nothing Is Hidden』（1986））、フォグリン（『Wittgenstein』（1995））らの優れた先行研究は存在しているものの、それらは第一にウィトゲンシュタインの言語観の変遷に考察の重心が置かれたものであり、第二に『探究』執筆以降のウィトゲンシュタイン哲学の進展までを十分射程に捉え切れていないものであった。

2. 研究の目的

これまでの研究において、ウィトゲンシュタインが『探究』執筆以降死の直前まで格闘を続けていた問題を解明し、この時期の彼の思索を、「前期」、「中期」、「後期」と並ぶ第四の思想期「**最晩期**」の思索として位置づけることを試みてきた。その成果をもとに、最晩期ウィトゲンシュタインの世界観を彼が前期の『論考』で示した世界観と比較し、その変遷過程を明らかにすることによって、従来の「前期と後期」の比較研究よりも包括的かつ正確なウィトゲンシュタイン哲学の全体像を描くことを目的とする。さらに、彼の思想の変遷を言語観の変遷よりも世界観の変遷の方に比較の焦点を合わせることによって、世界とそれを思考する主体の存立構造を新たな視点から解明することを目的とする。

3. 研究の方法

研究の方法は大きく分けて以下の二つ。ウィトゲンシュタインの文献研究（とりわけ、近年蓄積されつつある遺稿研究の成果をもとに）現代哲学において蓄積された主体・世界・言語についての研究の活用。

4. 研究成果

一年目は、ウィトゲンシュタインの世界観の内実と来歴を探るために、前期の遺稿を中心として、そこで考えられていた言語と世界の関係についての分析を行った。

まず、前期の主著『論理哲学論考』およびその下書きとなった『手稿』において、命題が偽であることと命題を否定することとの間にどのような違いがあるのかを分析した。その結果として、「命題と現実との不一致」という考え方がはらむ問題点が析出されるとともに、「否定の領域の確定性」を前提とした前期の世界観が明らかになってきた。

続いて、『論理哲学論考』以降に書かれた「論理形式についての若干の考察」をもとに、命題の「矛盾」と「排除」との違いがどのように捉えられているのかを分析した。その結果として、否定可能性と異なる文法的可能性の領域設定の内実を明らかになり、要素命題の相互独立性を放棄した後のウィトゲンシュタインの世界観の一端を析出することができた。

以上の前期ウィトゲンシュタインのテキスト分析によって、命題の否定領域が単一に確定している前期の平面的な世界観と、異なる文法体系に応じた異なる否定可能性の領域を含んだ中期以降の多層的な世界観との対比が明らかにされた。そのうえで、言語ゲーム内部における否定可能性と、言語ゲームそのものが成立しないという可能性との対比によって、後期から最晩期の思索における言語ゲームの可能性の条件としての偶然的事実がもつ超越論的性格について考察する

ための基盤が与えられた。

二年目は、一年目の成果を踏まえて前期ウィトゲンシュタインの世界観が中期から最晩期の世界観へと転換していく過程を明らかにすることを試みた。

一年目の成果として得られた否定可能性に関する考察をさらに展開し、「この対象は赤い」を否定する可能性の体系としての色の文法体系の内実を明らかにするとともに、ウィトゲンシュタインの前期の思想と中期の思想のうちで現実世界と否定命題との一致・不一致がいかにして可能となるのかを解明した。

その上で、最晩期の蝶番命題の否定において提示される可能性を前期の論理空間内の可能性と中期の文法体系内の可能性との対比において分析し直した。その結果として、否定可能性の領域が、＜論理空間内的・文法体系内の可能性＞、＜論理空間外的・文法体系外的可能性＞の三つに区分されることが明らかになった。このことによって、最晩期ウィトゲンシュタインがこの後者二つの可能性についての考察を行っていたことを明らかにし、ウィトゲンシュタインの世界の捉え方に対する変化の一端を解明した。

最終年度となる三年目は、一、二年目の成果を踏まえて前期ウィトゲンシュタインの世界観が中期から最晩期の世界観へと転換していく過程を明らかにすることを試みた。

まず、一、二年目の成果として得られた否定可能性に関する前期から最晩期へのウィトゲンシュタインの考察の変遷を、後期のアスペクト知覚についての議論へと援用することを試みた。具体的には『哲学探究』の第二部においてアスペクトの閃きが「内的関係の知覚」として捉えられている点に着目し、これを前期・中期の内的関係についての考察と比較した上で、アスペクト知覚とは他の諸対象との間の否定的関係（文法的な排除関

係）のもとで対象を見ることに他ならないことを明らかにした。

続けて、このような世界の捉え方が前期の世界観とどこまで同じで、どこから変わっているのかを分析した上で、主体と世界と言語という三つの要素の相互関係についての考察を行った。具体的には、命題と世界との一致（命題の真偽）についての前期・中期・後期・最晩期のウィトゲンシュタインの見解を取り出した上で、「一致を確かめる主体」が消去される前期・中期とその主体が世界の中に受肉する後期・最晩期との比較検討を行った。その上で、ウィトゲンシュタインにとって課題であった「思考可能性の限界」がどのように変化していったのかについての考察を行い、言語の可能性の条件のうちに主体が住まう世界の偶然的なあり方が包含されていく様を明らかにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計6件)

「蝶番命題の否定が位置づけられる場所
前期・中期・最晩期のウィトゲンシュタインの思考を通じて」、山田圭一、『千葉大学人文社会科学研究』、査読無、第27号、1-11頁、2013年。

「物語りえず語りうる過去 - 大森過去論と野家物語り論との比較を通じて -」、山田圭一、『思索』(東北大学哲学研究会編) 第45号(2)、査読有、433-453頁、2012年。

「ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』」、山田圭一、直江清隆・越智貢編『知るとは 高校倫理からの哲学2』(岩波書店)、査読無、110-113頁、2012年。

「帰属者の文脈主義モデルを用いた認識的規範の多元性の解明 - 正当化の内在主義

と外在主義の調停を目指して - 」、山田圭一、
『科学哲学』(日本科学哲学学会編)、査読有、
第 44 号、35-47 頁、2011 年。

「知識の物語り論序説 - 一人称知識言明
の分析を通じて - 」、山田圭一、『東北哲学
会年報』(東北哲学学会編)、査読有、第 27
号、1-14 頁、2011 年。

「確実性と偶然性の邂逅」、山田圭一、『ウ
イトゲンシュタイン (KAWADE 道の手帖)』(河
出書房) 査読無、147-153 頁、2011 年。

[学会発表](計 3 件)

山田圭一、「アスペクトの変化とはどのよ
うな変化なのか - ウイトゲンシュタイン
哲学と知覚の哲学の交差点 - 」、日本現象
学会、2013 年 11 月、南山大学(愛知県・
名古屋市)。

山田圭一、「物語りえず語りうる過去 -
大森過去論と野家物語り論との比較を通
じて - 」、哲学講座講演会、2012 年 7 月、
東北大学(宮城県・仙台市)。

山田圭一、「蝶番命題の否定が意味するも
の」、人文科学研究所哲学第 2 回ワークシ
ョップ「ウイトゲンシュタインの哲学を
めぐって」、2012 年 10 月、日本大学(東
京都・世田谷区)。

[図書](計 1 件)

『21 世紀の哲学史』(昭和堂)、菅原潤ほ
か編、2011 年、244 頁(152-168 頁)。

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者 山田 圭一
(Yamada Keiichi)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：30535828

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：